狭衣物語における乳母の役割

――女二宮物語、飛鳥井女君物語、今姫君物語を中心に――

齋木泰孝

（一）

狭衣物語の主人公・狭衣の大将と女二宮との間の恋物語は、平安時代物語諸作品にみえる多くの恋物語に比べ、やや様相を異にしているように思える。この物語の巻二で、狭衣が女二宮のもとに忍び一夜を共にしてしまう事件が、女二宮物語の中心である。ただ、この事件は、作者の綿密な構想の上につくり出されたものであって、そも物語は、巻一での天稚御子降下の条りに始まる。この前年の五月、長雨の降るつれづれな折、強いられて吹いた、狭衣の笛の音のすばらしさに賞でて、天稚御子が天降る。狭衣を天上につれ去ろうとする天稚御子の袖をおさえ、狭衣を地上にひきとめた帝は、その禄として、狭衣に、我が愛娘・女二宮を与えることに決めた。しかし、この時既に狭衣が心深く想いそめた別の女性・源氏宮があり、「いろいろに重ねては着じ夜半の狭衣」とひたすら思い込んだ狭衣にとって、帝の女二宮降嫁の話は迷惑この上ないものであった。源氏宮以外のいかなる女性とも結婚するつもりなど全くなく、さりとて、帝の意向とそれを受けた父の度重なる督促をはっきり拒むこともできず、狭衣の心は重く沈むばかりであった。やがて年改まり、いよいよ降嫁は四月と定った。そうしたある夜、乳母の妹である中納言典侍のもとを訪れた狭衣は、ふと聞えてきた琴の音にひかれ、女二宮を垣間見る。そしてそのまま、女二宮と一夜を共にしてしまうのである。

帝をはじめ周囲の勧めがあって、結婚の日どりも決っていながらも正式の結婚を避けたがっている狭衣が、その相手である内親王といとも簡単に通じてしまうという、この事件の設定自体かなり不自然なものである。そこで、作者は、この物語に新たに一人の女房を登場させた。その女房というのが先の中納言典侍である。

内裏に候ふ中納言の内侍は、大弐乳母のおとゝぞかし。皇后宮にも睦まじき御ゆかりにて、幼くよりさぶらへば、宮たちをも、見たてまつるついでにも、時々聞え出でしかば、大将も、をかしき有様を耳とゞめ給はぬにしもあらねば、かゝる御気色見給ひて後には、煩はしうなりて、同じ百敷のうちながらも、弘徽殿にはことに参り給ふこともし給はぬを、大弐乳母、「くだりて後は、同じ心にてこそ」など申し置きしかば、見睦び聞ゆれば、折々に、つぼねのわたりに立ち寄りなどし給ひけり。　（二の126）

この大弐乳母は、巻一に「御乳母の、大弐の北の方にてあるなりける」と登場して以来、巻四で狭衣が帝位に即いたことによって「大弐の、三位などして、御気色給はる人多かりけり」まで、狭衣に親

しく仕えて、狭衣の「思え勝れたる」乳母である。

狭衣物語巻二に及ぼした、源氏物語の影響については既に先学の指摘のあるところであるが、とくに乳母についても、狭衣物語の大弐乳母と、夕顔巻にみえる大弐乳母との系図的な面での類似は明らかである。(注1)狭衣物語の作者は、大弐乳母を登場させるにあたり、光源氏の同名の乳母を思い浮べていたに相違ない。夕顔巻では、光源氏が病床の大弐乳母を六条に見舞うことをその物語の発端とするが、狭衣物語の場合、大弐乳母が夫に従って筑紫に下る際、乳母としての後事を托した妹の中納言典侍を、狭衣が宮中に訪ねる、それがこの女二宮事件の発端となっている。そして中納言は、女二宮の母・大宮にも「睦まじき御ゆかり」の者であった。

「聞えさすべきこと」などたび〳〵申せば、立ち寄り給へるに、「宮の、上にのぼらせ給ふ御供に」と言へば、本意なくて、そのわたりを佇み給ふ程に、箏の琴のいたうゆびたるを盤渉調に調べて、わざとならず、忍びやかなる、絶え〴〵聞ゆ。おしなべてのには似ずなつかしうをかしげなるは、「宮の御方なるべし」と過ぎがたくて、南の戸口の方に寄りて、聞き給へば、妻戸細目にあきて、火の影見ゆ。とがむる人もなし。火桶置きたり。「夜居の僧のあからさまに出でたる」と見ゆ。やをら寄りて、火を扇ぎ消ちて、琴の声するほど近う寄れど、宮も、上にのぼらせ給ひて、夜も更けにければ、人の音もせず、　(二の126)

せっかく訪ねた相手は大宮のお供で清涼殿に、この弘徽殿の辺りには人影もない。折しも琴の音が聞えてくる。天稚御子を天下らせた程の笛の名手である狭衣は、つい琴の音にひかれて妻戸近くに立ち寄る。妻戸には、夜居の僧が出ていったままにかけ金もかかっていない。男が女のもとへ忍ぶには絶好の機会である。しかし、中納言典侍を登場させたことから始る、こうした道具立てにはやや御都合主義の臭いもしないではない。さらにその時、女二宮の側には、母の大宮は勿論、分別ある女房（こうした折、もっともその分別が期待されるのは乳母である）もいないという条件が加わる。

大人しかりつる人、「例の乱り心地あしうなりにたり。「今宵はよもおこらじ」とこそ思ひつれ、夜ごとにさへなりぬるに、大宮のおはしまさぬ程に。誰かは、御かたはらにさぶらふべき」と言ひて、おるゝは、御乳母なるべし。物言ひつる人、「三の宮の御前には、中将さぶらはん」とて、御衣ひき着せたてまつりなどするこそ、「『この宮の御乳母子あり』と聞きしなりけり」とおぼしけり。　(二の128)

妹の女三宮の乳母子がいるにはいるのだが、何分にも若すぎて、男女のことについて経験もなく、男から女主人を護ることには心許ない女房である。

すでに定った正式な結婚を待たず結ばれてしまうというこの事件が起るためには、客観的な条件として、(1)中納言がいなかったこと、(2)人にとがめられることもなく部屋の内に入ることができたこと、(3)女二宮の側に分別ある女房（乳母）がいなかったこと、が挙げられるであろう。

そして、作者は、客観的な条件と共に狭衣の心理状態からみた必然性をも忘れてはいない。狭衣が女二宮との結婚を渋っていたのは、結婚することによって、源氏宮の愛が得られなくなることを恐れた

ためであって、女二宮に関心を全く持っていなかったわけではない。そんな狭衣に、一時源氏宮のことを忘れさせ、女二宮への興味をつのらせて、つい忍びこむ気にさせたのは、女房たちの噂話であった。物語における女房たちの噂話が物語の展開に大きな役割を果すことについては、稿を改めて述べるつもりである。

ともかく、この事件は、相方に乳母がいなかったということに、大きな要因があると言ってよかろう。乳母の設定は女二宮事件において重要な意味をもっていることに注目したいのである。

（二）

さらに、この私通事件のもう一つの特徴は、二人の間に仲媒となる人物が存在せず、いきなり狭衣と女二宮との関係ができてしまうことにある。このことの物語史における位置づけについては、既に拙稿で試みたところである。(注2)

さて、その翌朝、狭衣の忘れ置いた懐紙を見つけた大宮は、女二宮のただならぬ様子から、「さればこそ、人の入り来たりけるにこそありけれ。心憂や。誰ばかりにかありけん」と思い煩う。事件の真相を知るのは、当事者二人だけであって、それを二人とも口外しようとはしない。やがて夏にもなり、女二宮の懐妊は、大宮の目にもはっきりと疑いようのないものになった。

月比は、乳母達には「かゝる事あるは」なども、の給はず、心一つに思し嘆きつるを、猶かゝれば、一人してもて隠し聞ゆべきにもあらざりけり。又、「此人々の中にも知りたるもあらん」と、思して、出雲・大和などいふ御乳母たちを、忍びたる方に召し寄せて、とみにもの給はず、むせかへらせ給へるを、「いかなる事にか」と思ひ騒ぐに、からうじて、「かゝる事のおはしける。誰も知らぬやうはあらじを、などか今までまろには知らせざりける。「いかなりし事ぞ」なども、いかで聞かでは」などの給はせやらぬを、うち聞く心地もいかゞはありけん。ある限りあきれ惑ひて、たゞ物もえ聞えさせず、泣き入りたる気色ども少し知りたらんは、「いとかくやは」と見えて、頭集へて泣くよりほかの事なし。

（二の146）

その夜のことについて、何も知らない乳母たちには、女二宮の体の変化も、「御物の怪にや」としか思えなかった。乳母の一人は、「さりとも、事の有様知る人も侍らんかし。昔物語にも、心幼き召使人ゆゑこそ、かゝる事も侍りけれ。うちかはり、誰も、みたてまつらぬ折も侍らぬを」と、大宮に言う。昔物語にある「心幼き召使人」とは、おそらく、源氏若菜巻で、柏木を女三宮に手引きした女三宮の乳母子・小侍従あたりを指して言ったものと思われる。物語のなかで、男女を仲媒するのは、しばしば女房の役割であった。なかでも、特に親しく仕える乳母や乳母子は最適任と言える。女二宮の生んだ子の顔の狭衣に似ていることを聞いた大宮が、「中納言のわざにやありけん」とすぐに疑ったのも当然であろう。

狭衣が女二宮に忍んだ一夜のことのために、相手の男の正体不明のままでの出産、その心労の重ったあげくの大宮の死、母の死とその責任を公けにしょうとしない狭衣への恨みによる女二宮の出家と、物語はしだいに深刻の度を加えていく。この物語が悲劇的な方向に展開していく、その原因は、乳母たちがあの夜の出来事の真相を知

らなかった、また、当事者の狭衣も女二宮も乳母などに知られることを恐れたことにあると考える。

ありつる御文、懐より取り出でて取らせ給ふ。「まめやかには、いみじう忍びて、参らせ給へ。あなかしこ、大宮などの御覧ぜんに、取り出で給ふなよ。心にくき様に言ひなさるゝ手を、見おとさせ給はん。恥しの御目ひとつには、鳥といふ鳥の跡なりとも、無外に御覧ぜさせざらんは、あまりおぼつかなかりぬべければ」との給ふを、「それは、中〳〵参らせても甲斐侍らじ。大宮の御前などにとうで侍らんは、「便なくはよも」とこそ思ひ侍れ。上の御前なども、「あやしう音なきは、物憂き事にや」とこそ、たび〳〵仰せられしか。これ散らし侍らんも、などかは」と聞ゆれば、「あな佗し。あが君〳〵、さる事し給ふな。ただ一所に御覧ぜさせて、やがて破り給へ」と、まめやかに佗び給ふも、「怪し」と、おもふに、「まことには、かく常にの給ふ、御有様、近くて見せ給へ。さてや、げにこの世には留る心出で来けると。今宵なども便なかるまじくは」と、例ならず心いられしての給ふ。　(二の137)

狭衣は、中納言典侍にも事情をうちあけようとはせず、ふつうの懸想文のようにして、女二宮への後朝の文を中納言に托した。その文が大宮にみつかることを極端に恐れる狭衣の態度を、中納言は不審に思う。狭衣の文を持って女二宮のもとを訪ねた中納言は、大宮の嘆き悲しむ姿を覗きみた。

大方に取り出でたらば、いと便なかりぬべかりけり。「もしさる事もあらば、『我がしたる』とこそ、思さめ」と、思ふに、煩はしうなりて、取りも出でず、なほ隠し持たり。(略)「むべなりけり」と、心得果てぬるにも、「むげにしるべなくては、いかでか、さる御事もあらん。又さるにては、この文を、かくせさせ給ふべきことかは」と、「いかなる事にや」と、胸塞がりて、おぼつかなく怪しければ、とばかり物も言はれず、つく〳〵と、見たてまつるに、大宮の御心の中ぞいとほしう思ひ聞ゆる。　(二の139)

その夜のことに気づいた中納言典侍は、大宮を気の毒だとは思うものの、「この御方の人に、おぼしの給はするを、かならず思し疑ふらんかし」と思う。また一方では、狭衣と女二宮はやがて結ばれるはずの仲なのだから、思い切って大宮に、昨夜の男が狭衣であったことを伝えようかとも思う。しかし、狭衣の内密にしたい気持を思いやった時、大宮と狭衣との間の板ばさみに苦しみ、「わが過ちのやうに」悩む。その後、身重の苦しさを夏の暑さのためと称して、女二宮は宮中から大宮の里に退った。それを聞いた狭衣は、女二宮に会わせてくれるよう中納言に頼むが、中納言は「今は、あるにもあらぬ様になり給へれば、夜昼、大宮の添ひおはしませば、いかでか。さらば、おぼつかなきことをさへ思し召したんめるに、さやうにもほのめかさせ給へ」と、狭衣の頼みを断り、大宮にそれとなく相手は自分であったことをほのめかすよう勧めるが、この期に及んで、狭衣は中納言にさへ、女宮の懐妊は自分には関係ないことと空とぼけて見せるのであった。

女二宮は無事男子を生み、乳母たちも、父親が誰であるか、うすうす気づいたが、時すでに遅く、事態はどうにもならぬところまできてしまっていた。

中納言の典侍、月比、「怪し〳〵」と目とまる事も、耳立つ事

も多かりつれど、「我心の癖にや」と思ひ消ちつるに、（略）御湯よりのぼりて臥し給へる御顔の、「たゞ、かの人の御児かな」と見えさせ給ふを、見るに、「大弐の乳母にこれを見せたらば、いかばかり、世に知らず喜び聞えん」と、我だに、いみじうらうたうおぼえさせ給ひて、「いかでか、とく見せたてまつらん」と、思ひあまりて、出雲の乳母に、「空目かとよ。たゞ、その御顔とこそおぼえさせ給へ」と言ふを、「いでや、しらぬやうはあらじ」と、つらければ、「さしも、見えさせ給はず。よき人どちは、よしなき人に似るものなれば、まして同じ御ゆかりなればこそは。されどこれは、今より様殊に、王気さへつかせ給へる様にて」と言ふも、をかしかりけり。（二の161）

狭衣と女二宮との間の子を、帝と大宮との子として、世間に公表したのは、出雲乳母たちの分別からであった。そうした以上は、乳母たちも、軽々しく事の真相を口外してはならない。中納言典侍も同様に、姉の大弐乳母にも決して洩らすようなことはしなかった。

女二宮物語の悲劇は、狭衣の優柔不断の態度にそのもっとも大きな要因があることに間違いなかろう。具体的には、中納言典侍にさへ事情をうち明けることをしない狭衣の態度である。さらに、狭衣と大宮との板ばさみで動きのとれなくなってしまった中納言典侍、男の正体が狭衣であることをなか〳〵見抜けなかった女二宮の乳母たち、そうした人物を設定することによって、この悲劇が成り立っていると考える。先にも述べたように、狭衣と女二宮の相方に、最初から分別ある乳母が存在していれば、こうした悲劇は起らなかったであろう。物語における乳母の役割ということを考える時、狭衣物語作者の構想は、乳母という人物の設定の上に成り立っていることに気づかされるのである。

（三）

分別のある乳母がいなかった、あるいは乳母の分別の生かしようがなかったこと、それが女二宮物語における悲劇の原因であった。一方では、逆に乳母の分別が悲劇的な結果を招く場合もある。それは、巻一に語られる飛鳥井女君物語である。

宮中退出の途次、狭衣は仁和寺の僧に勾引されようとしていた女を助けた。女の家まで送り届けるが、その家はいかにも貧しげな家であった。それを恥じた女は、狭衣に、「泊れともえこそ言はれね飛鳥井に宿りはつべき蔭しなければ」と歌を詠む。折からさし出た十六夜の月影に見た女の美しさにひかれた狭衣は、その女と一夜を共にし、以後、夜な夜な忍んで通うことになった。

この女君は、帥の中納言といふ人の女なりけり。親達は皆亡せにけり。乳母、かの主計頭といふ者の妻にて、なま便りあるが、思ひかしづきて年頃過しけるを、そのおとこの亡せて後は、いとわりなき有様にてぞありければ、仁和寺の威儀師といふ者を語らひて、この君の事を扱はせけるに、おほけなき心ありて、人知れず思ふ心つきて、かゝるわざをしけり。（一の72）

夫の主計頭の生きているうちは、乳母も何とか女君の面倒をみることができたのだが、夫の死後、乳母の方も生活不如意となり、ある僧に女君の世話を頼んだ。しかし、身にあるまじき愛欲の心を起した僧は、女君をつれ去ろうとして失敗したのであった。乳母は、そ

の僧をうとましく思いながらも、僧の援助が受けられなくなった今、これからの女君の暮しをどうするか、思案にくれる。乳母は女君に次のように語る。

「この人、かくてやみ侍りなば、御前の御あつかひ、いかゞ仕うまつらん。いみじきわざかな。はや〳〵、「源氏宮の御内参りに」とて、やんごとなき人々、いと多く参り給ふ中に、御前の御かたちばかりなる人は、おはせじ、参り給ひね。女が身一人は殊にも侍らず。いづちも〳〵まかりなん。このおはすらん人は誰ぞとよ。怪しういたく忍び給ふは、御前は知らせ給ひたらん」といへば、「知らず。たゞ心より外にあやしき有様なれば」とて、うち泣き給へば、「あはれ」と見て、我も泣きぬ。　(二の73)

ここでも、自分の正体を容易に明かそうとはしない狭衣の態度が悲劇の要因となる。乳母は、誰ともわからぬ男に女君をまかせてしまうより、むしろ女君を女房として源氏宮に出仕させようと思ってみたりもする。とにかくこのままでは、二人とも将来が不安である。そこで、乳母は知る辺を頼って東国に下る気になり、女君も「いづくなりとも、おはせん所へこそは。さらで、いかゞ。見置き給はん、安らかにやは、おぼすべき。思ひかけぬ有様は、いかにも、あるべき事ならねば」と、我が名を告げようともせぬ男を頼ろうより、乳母と共に下りたいと思う。乳母が狭衣の正体を知っていれば、京から遠く離れた東国に下ることなど、おそらく思いはしなかったであろう。下向の決った後も、今の不如意な暮しぶりを恥じる女君は、自分の素姓を明かして、下向のことを狭衣に告げようともしない。こうした、乳母、女君、狭衣の三人の間の気持の行き違いが、後に悲劇を招くことになるのである。

もともと、乳母は狭衣に良い感情を持っていない。狭衣が仁和寺の僧から女君を救ったことからして、そのために生活の方便が失われてしまったのであるから、狭衣のそうした行為は乳母には迷惑なことに思えたのであった。女君も狭衣に心ひかれぬでもないが、狭衣の「自分に口うるさい正妻がいて、そのため名を明すこともできない」という言葉に、男の頼み難さを思う。そんな女君の態度に気づいた狭衣は、女君を父親の邸に女房としてひき取ろうかとも思うが、例の、「人知れず思ふあたりの、聞き給はんに、戯れにも『心とゞむる人あり』とは、聞かれたてまつらじ」と考え、決断ができずにいる。

いよいよ東国下向の日も迫った折しも、女君の懐妊がはっきりする。体の異常に加えて、狭衣と乳母のどちらに自分の身を任せたらよいかと思い悩む女君の様子に、乳母は重ねて男のもとに留るよう勧めるが、女君は男に心ひかれながらも、懐妊のことを告げ、狭衣に我が身を托そうとする気にもなれないでいる。男にひかれる女君の気持ちは、乳母にもみてとれ、その上、東国での生活に不安がないではない。三者三様の思惑のからみ合った、この局面を打開するために設定された人物が、狭衣の大弐乳母（先に述べた中納言典侍の姉）の子・式部大夫道成である。

御乳母の、大弐の北方にてあるなりける、子ども、あまたある中に、式部大夫にて、来年、官得べきが、かやうの中には、心ばへ・かたちなど、めやすくて、少々の上達部・殿上人よりは、世の人も心殊に思ひたり。自らの心にも、又思ふ事なく、いみじき

好き者の色好みにて、「いかでか、かたち、世にすぐれたらん女を見ん」と思ひて、婿に欲しうする人々の辺にも寄らず、君の御真似をのみして、夜、夜中の御供に後れず、又、わたくしの里わたりをのみ尋ぬるわざをのみしけり、この女君は、太秦に籠り給へりけるを、覗きて見けるより、こと心なくなりて、消息などしけるを、この乳母は、いみじう心づきに思ひて、(略) この式部大夫、「親の送りに、筑紫へ下るに、さるべからん人の、をかしからんもがな。率て行きて、やがて、わが国へも下らばや」と思ひて、(略) 消息したりけるに、乳母は、思ふやうにめでたく思えて、東路にも思ひとまりて、「まことに思すことならば、しばし、君にも、しらせたてまつらじ。下り給はん程に、みそかに、迎へたてまつり給へ」と言ひやりけるを、　(二の93)

かつて、乳母が源氏宮への出仕を勧めたり、狭衣が女房としてひき取ろうかと考えた、そんな女君にとって式部大夫は分相応の相手と言えよう。いくら身分の高そうな相手であっても、正体のしれない男の「蔭妻」であるより、式部大夫の正妻となる方が、女君の、さらに自分にとっても、将来の幸せにつながると、乳母は判断した。そこで、うすうすは男の正体に気づき、そのためますます狭衣に強くひかれていく女君の心中を察した乳母は、道成のこと、筑紫に下ることを隠したまま、口実を設けて女君をつれだす。しかし、さすがに乳母も「心も知らぬ人に、うち任せ聞えて、はるかなる程に出で立ち給はんは、口惜しかるべき御様かな」と、女君を不憫に思うのであった。

一方、女君を失った狭衣は、「余り、我心の、怠〳〵しきぞかし」と悔んでみるものの、行方不明となった女君を、今さらどうしょうもない。

そして、道成の求愛を拒みつづけた女君は、西下の途中、とうとう虫明の瀬戸に身を投げてしまうのである。

この飛鳥井女君の乳母についてみる時、東国下向にしろ、九州西下にしろ、そのやり方は多少強引ではあったが、世間を知る者の常識的な分別によるものであると思われる。そうした分別が、結果的には女君の入水自殺という悲劇を招くことになったのである。飛鳥井女君物語において、乳母が、女君の運命を左右する強い力をもつものとして登場していることについて述べてきた。さらに、乳母子道成の存在もまた、先の中納言典侍と同じく、事件の発端となるに欠かせないものとなっている。優柔不断な主人公たちの周囲にあって、乳母に代表されるような脇役が、狂言回しの役を果すことによって、物語は展開していくことができるのである。

(四)

狭衣物語の展開に重要な役割を果す脇役として、さらにもう一人の登場人物についてふれておきたい。それは、飛鳥井女君、女二宮両物語の間を縫うようにして並列的に語られる今姫君物語における、姫君の母代のことである。

狭衣の父には三人の北の方があって、うち洞院上にだけは子がなかった。そのため、養女として洞院上にひきとられたのが今姫君である。源氏物語の女君で言えば、近江君にぴったりあてはまるような人物である。字数にも合わないとんでもない歌を、母代の教える

通りに狭衣に詠みかけてきたり、琵琶を弾きながら「いたち笛吹く、猿奏づ」とうたい、母代も「いなごまろは拍子うち、きりぎりすは」と和したりなど、狭衣の失笑をかう。この姫君の教養のなさは、母も乳母も早くなくし、無教養な母代に育てられたせいであった。とにかく、この母代は、貴族社会の規範にはずれた人物である。先の飛鳥井女君の乳母も、恋愛よりも生活を選んだ点では、貴族社会の理想からはずれた人物と言えよう。

さて、入水した飛鳥井女君は、運よく助けられて、やがて狭衣の子を出産した。一方、その間の事情を知らぬ狭衣は、その翌年上京してきた道成自身から女君の入水を聞く。女君は死んだものとあきらめるよりほかなかった。しかしその後、粉河寺参詣の折、偶々出会った片眼の僧が実は女君の兄であることを知り、その僧の話から女君の生きていることを知るが、女君の居場所までは確かめることができなかった。女君のその後の消息について、意外にも、今姫君の母代が語り出すのであった。

「(略)この御前の御母上は、故中納言の御妹ぞかし。その姉は女院に中納言の君とて候ひしを、筑前の前司なにがしの朝臣に盗まれて、遠き程までおはしたりしが、守亡せて後、尼になりて、常盤といふ所におはする、「中納言の女は、乳母の所に心細げにて」など、聞かせ給ひて、常に召ししかど、「心かしこう、物したゝかなるさまにしなさん」とて、参らせざりしほどに、御覧ずるやうも侍りとかや。前の別当左兵衛督の子の少将と名のらせ給ひけるを、「いでや、さやうの生君達の蔭妻にて、益なし」とて、三河守なにがしが殿に親しう候ふらんを、知らせざりけるとかや。浅ましきことなりかし。女にも知らせで、盗ませて筑紫へ下しける道にて、女泣きこがれて、「身を投げてん」とて、せがいに出でゝ侍りけるを、兄の禅師の君、片眼悪しき法師、いみじき聖にて侍りける、伯母につきて筑前より上りける、思はざる外を見つけて、常盤に置きたりける。世に知らず美しき子を生みたりけるは、いかにとかや、その案内え申さじ。明暮物思ひて、さいつ頃、尼になりてこそは亡せ侍りにけれ。(略)」など言ふは、

(三の240)

今姫君の亡くなった母(伯の君)の姉は、かつて女院(一条院后宮)に仕えて中納言君と呼ばれたが、今は夫と死別し、常盤に尼となって住んでいる。この姉妹の兄というのが飛鳥井女君の父であった。即ち、伯の君、常盤の尼君は、女君の叔母にあたる。

この物語の作者は、このような人物関係を設定した上で、母代に、今までの狭衣と女君とのこと、道成とのこと、乳母のこと、入水事件、やがて助けられ、叔母の尼君にひきとられて出産したこと、そして女君は亡くなったこと、飛鳥井女君物語の一部始終を語らせている。この母代は、玉上博士の言われる「作中世界に生き、そしてそれを語ってくれる語り手たる古御達」なのである。(注3)

さっそく常盤の尼君を訪ねた狭衣は、一条院后宮に女房として仕えていた叔母姉妹の縁で、女君の遺児が后宮のもとにひきとられたことを知る。これで飛鳥井女君物語は、一応の幕を閉じると言ってよいかと思われるが、その遺児をめぐって、一条院后宮の女である一品宮の物語へとさらにつながっていくことになる。一品宮物語も悲劇的な物語であるが、狭衣が一品宮と無理やり結婚させられてし

まったのは、飛鳥井女宮の遺した子のためであったし、一品宮との不幸な結婚生活を送るのも、狭衣が女二宮に心を残していたからであった。このようにみていくと、母代の語ったことが、今まで、源氏宮物語を軸にして、並列的に語られてきた、飛鳥井女君、今姫君、女二宮の各物語が、それぞれ一品宮物語へと集約されていく重要な契機となっていることを知るのである。

以上、狭衣物語において、乳母、または乳母の血縁者、あるいは乳母に代るような人物は、男主人公と女主人公とをつなぐ存在として設定されて、一つの事件の発端となり、また物語を展開させていく重要な役割を果すことになる。さらに、そのことによって短篇的ないくつかの物語が一つに結ばれ、長篇性をもつ物語として完成されるのである。狭衣物語作者の長篇的構想は、脇役の人物設定の上になされたものであり、物語におけるこのような技法は、作者が源氏物語から学んだものの一つとして無視できないものと考える。

（引用はすべて岩波古典文学大系「狭衣物語」による。ただし、文字使いを一部改めたところもある。）

注1　土岐武治「狭衣物語巻二における源氏夕顔巻の影響」（中古文学14号）

注2　拙稿「平安時代物語文学における一つの型」（安田女子大学紀要8号）

注3　「源氏物語の読者」（源氏物語評釈別巻一「源氏物語研究」二五三頁）

（安田女子大学助教授）